

プレスリリース

2026年8月24日
国境なき医師団（MSF）

**令和 8 年熊本地震：八代市で「心のケア」の活動を開始
——地震発生からまもなく 1 カ月、高まる心理ケアのニーズに応える**

令和 8 年熊本地震により被害に遭われた皆さまへ、心よりお見舞いを申し上げます。また、皆さまの安全と被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

国境なき医師団（MSF）は、令和 8 年熊本地震で甚大な被害を受けた熊本県八代市で、「心のケア」の活動を始めた。避難所で過ごす被災者を対象とした「けんこう講座」を 8 月 23 日に開始したほか、今後、被災者の対応にあたっている自治体職員などを対象に心理士によるサポートを行う予定だ。

地震発生からまもなく 1 カ月となる今、避難生活のストレスや今後の不安などにより心理ケアへのニーズが高まっていることを受けて、活動開始に至った。

高まる心理ケアへのニーズ

MSF は 8 月 2 日から[調査チームを派遣](#)し、熊本県の複数の被災地域で医療ニーズを把握するための調査を行い、自治体や医療関係者、様々な年代の被災者から話を伺った。この結果、直接的な医療ニーズは各機関の活動によりおおそ満たされつつあるものの、長引く避難生活におけるストレスや、先の見えない今後への不安、頻発する余震などにより、心理ケアへのニーズが高まっていることが確認された。

さらに、被災者の対応にあたる自治体や高齢者施設などの職員が、高いストレスにさらされたまま十分なケアを受けられていないことが明らかになった。

これらの状況を受け、MSF は熊本県臨床心理士・公認心理師協会、災害派遣精神医療チーム（DPAT）、災害派遣医療チーム（DMAT）などの関係機関と連携し、以下の活動を行う。

避難所での「けんこう講座」

ストレッチ教室や、体と頭を使うアクティビティ、健康に関するミニ講座などを行い、避難生活で蓄積したストレスや疲労をやわらげるとともに、参加者同士がリラックスして交流できる機会を提供する。また、心身に関するアンケートを行うことで、個別の心理ケアニーズを把握して必要な支援につなげる。

8 月 23 日には、八代市内の避難所 2 カ所で「けんこう講座」を実施。MSF の心理士と理学療法士によるストレッチ教室やボールを使ったアクティビティのほか、不眠や不安、災害時の心の保ち方などに関するミニ講座を行った。計 9 人が参加し、「なかなか体を動かす機会がなかったので、皆で声を出しながら体を

動かせて楽しかった」「不眠についてなど、知らなかったことを聞けてとても有意義だった」といった声が寄せられた。

支援に携わる人をケアする「支援者支援」

災害時、自らも被災しながら地域住民を支える自治体職員などの人びとが、高いストレスの下、必要なケアを受けられないまま仕事を続けていることが多い。八代市でも同様の状況が確認され、MSF は今後、自治体や高齢者施設の職員を対象に心理士によるサポートを行っていく予定だ。

現地で活動にあたる心理士の福島正樹は、「自らも被災しながら住民を支えるエッセンシャルワーカーの方々が、心に傷を抱えたまま働いています。『支援者支援』のニーズは非常に高いと感じます」と語る。

MSF は八代市で当面 1 カ月をめどに、「けんこう講座」や「支援者支援」の活動を行っていく予定だ。その後は地域の関係機関に活動を引き継いでいく。

日本国内では能登半島地震などでも活動

MSF はこれまでも、阪神・淡路大震災、東日本大震災、平成 28 年熊本地震、西日本豪雨、能登半島地震など、日本国内の災害に際して援助活動を実施してきた。緊急の医療・人道ニーズがあり、それに対する支援が不足している場合、補完的に活動を行っている。

活動資金について

今回の熊本地震における活動資金は、これまでに MSF に寄せられた寄付から充当しており、本活動に用途を限定した寄付の受付は行っていない。寄付を検討いただいている方へは、MSF の活動全体に活用される、用途を限定しない形での寄付を呼び掛けている。

MSF 日本事務局長の村田慎二郎は、「こうした緊急時の活動は、皆さまからのこれまでの温かなご寄付で実現することができており、心より感謝申し上げます」と述べる。

以上

本件に関するお問い合わせ先：

特定非営利活動法人 国境なき医師団日本 広報担当：高橋哲子

携帯：090-5401-5176

E-mail: press@tokyo.msf.org <https://www.msf.or.jp>

メディア向け X（旧ツイッター）アカウント：@MSFJ_Press